

運営委員からの寄稿

大学に求められる持続的発展の仕組み

秋田県立大学理事長兼学長 小林 淳一

筆者が企業に所属している時、ISO14001（環境）の認証取得に携わった。ISO14001は、地球環境改善に関する取組である。主に工場の生産現場が対象となり、省エネルギーや生産活動におけるあらゆる無駄を排除し、環境負荷を低減する活動を継続的に行う仕組みの構築である。

筆者達は、これを研究活動（主に研究テーマおよび開発仕様設定）に広げようとしていた。筆者はその責任者になった。最初は、その趣旨もよく分からず全くの受け身であった。証拠としてのドキュメントシステムや実行プロセスが理解できていないため、認証評価機関の指摘への対応に追われ、とにかく早く終わってほしいと願うばかりであった。しかし、ある時認証評価機関の担当者が言われた言葉が印象的であった。それは、「皆さんは、自分で目標を決め、それを実行するだけです。私たちが何かを押しつけるものではありません。皆さんが決めた通りに実行しているかを見るだけです。」とおっしゃった。この言葉を聞き“目から鱗”が落ちた。「そうか、自分たちのやりたいように動き、持続的に改善していけば良いのか。」と納得した。今までは他人から押しつけられ、やりたくもない仕事としか見ていなかった。自分たちの現状を見つめ課題を抽出し、無理のない持続可能な改善計画を立て、実行していけば良いのである。そして1年後、実績をチェックし、次年度の目標・計画に繋げていく。この繰り返しを行い、正のスパイラルを作ることである。これがPDCAサイクルである。ちなみにこうしてISO14001の認証取得が無事行われた。

最近はや々なところでPDCAが組み込まれるようになってきた。大学の質保証はまさにこのPDCAサイクルの構築に他ならない。教育、研究、地域貢献、大学運営と様々な軸で構築が求められる。特に教育については、教育の質保証として大学認証評価における必須事項となっている。継続的な教育改善は、様々な規定や手順書によって体系づけられ、誰でも同じように行える仕組みになっていなければならない。教育のスリーポリシーを基準に大学全体から、部局、そして個人まで、それぞれのレベルでPDCAを回す必要がある。従って最終的には、教職員一人一人が主体となる。しかし、ほとんどの教職員はPDCAを回す経験がないので、かつての私と同じ考えになりがちである。そこでPDCAとは何かを学ぶところからしっかりと定着させる必要がある。またPDCAを回すためには、現状を正しく認識するためのIR機能が重要である。様々なデータを収集しそこから課題を抽出し次の改善につなげる、あるいは成果を可視化し、うまく実行できているかの評価にもつなげることもできる。

この様に持続的発展の仕組みは大学運営の根幹であり、ステークホルダーに対して大学運営の健全性を示す最大の手段となる。

※PDCA；Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Action（改善）